

スラムに住む中流階級

—バンコク、クロントイ・スラムにおける「コンパウンド」の居住実態—

建築学専攻
住環境計画研究

MJ21065 庄司 栄介^{しょうじ えいすけ}
指導教員 清水 郁郎

1 研究背景

1.1 なぜスラムはなくなるのか？

本研究は、スラムという古くて新しい問題に、住人の日常的な行為、特に近隣に共住している住居群の動態、という視点からアプローチするものである。

バンコクでは、1960 年代からスラム人口が急増し、政策の対象として注目されてきた。しかし、低所得者層向けのアパート建設や郊外へのリロケーション等の政策は、住民が都心のスラムへ再流入するといった結果となった。また、現在バンコクにおいて人口の膨張はすでに止まっており、今後減少していくと言われている。一人当たり GDP は約 16,744 ドルとなっており⁽¹⁾、先進国並みの数値である。しかし依然としてスラムはそこにある。なぜスラムはなくなるのだろうか？なぜ居住者はスラムに住み続けるのだろうか？スラムは、居住者にとってどのような意味合いを持つのだろうか？

1.2 重層化を続けるスラム

こうした問いに対して、本研究では居住者の視点からアプローチする。スラムは、貧困、危険、不衛生といった負のイメージや、社会関係資本の充実したコミュニティといった正のイメージ等のイメージが都合よく切り取られ排除や支援の対象となる。しかし実際には、遠藤が指摘するように都市の急激な変化のもとで、スラム内部にも階層性が現れ、2 世 3 世化や新型コロナウイルス、また周辺国からの移民労働者の存在はそうした階層を揺れ動かしている⁽²⁾。

1.3 近隣居住型「コンパウンド」

複雑な様相を呈すスラムの実態を考える上で、親族関係を中心とした社会関係は重要な要素の一つである。Askew が指摘するように、住民が単独で地域に入ることとはほとんどなく、多くの世帯が相互の繋がりを維持している。家族や友人、仕事仲間などのネットワークが結束力のある社会構造を形成している⁽³⁾。そこで本研究は、親族関係者が近距離に共住している場所をスラムの中から選定し、その場所の内実を調査する。

また、本研究ではそうした場所を「コンパウンド」と呼称する。「コンパウンド」とは、人間社会を構成する最小の居住単位としての何軒かの家屋の集合体である。水野は東北タイにおいて、土地を契機とした近親の生産と消費の協同体を屋敷地共住集団（multihousehold compound）と呼称した⁽⁴⁾。水野はこれをタイ村落の特徴とするのではなく、各世帯の家族周期と連関させ、村落の発展段階のある時代に見られる現象、あるいは土地と人口とのバランスが都合のよい条件のもとでのみ現れる現象かもしれないと考えている⁽⁵⁾。各世帯の社会状況、またはよりマクロな世帯を規定する経済状況等と紐づけて住居を動態的に捉える視点は非常に示唆深く、本研究においても有効だろう。

2 研究目的と方法論

2.1 研究目的

以上の背景から、本研究は社会関係が近隣に集中している「コンパウンド」の動態を明らかにすることを目的とする。「コンパウンド」がいかに形成され、いかに維持または解体されていくのか、物的環境から社会環境、そして居住者の経済状況にまで着目し探求する。

2.2 方法論

スラム居住の実態を捉えるため、本研究では参与観察による定性的な調査、建築学的な実測、空間の 3D スキャン、インタビュー、写真撮影を行った。参与観察においては頻繁に対象地を訪れ、実際に自分自身もその場で行われている宴会等の社会的活動に参加した。写真撮影においては空間の使われ方とその変化を調査するために同じ位置、角度から定期的に写真を撮影した（図 1）。それらのデータを統合して分析に活用した。調査は 2024 年から 2025 年まで 2 年間継続的に行った。

3 研究対象地

3.1 クロントイ・スラムの形成

対象地であるクロントイ・スラムはバンコク最大級のスラムである。1937 年頃、クロントイ港の開発に伴い、全国から職を求めて人が集まった。地価が高かったため、

港湾局が所有する湿地を不法占拠することでスラムが成立した。現在では 39 のコミュニティに、84,784 人、21,784 世帯が暮らしている⁽⁶⁾。

3.2 ロック 456 コミュニティ

本研究ではクロントイ・スラムの中でも、ロック 456 コミュニティに焦点を絞る。本コミュニティは地域の上部を走る計画道路と対照的な折れ曲がった細い路地が特徴的である。その中でさらに、社会関係が集中している住居群をケーススタディとして選定した。

4 研究結果

4.1 「コンパウンド」の形成

以下の 3 つの要素が「コンパウンド」を形成していた。

4.1.1 政府主導の地域改善事業

元来、この地域は不法占拠区であり、路地よりも先に住居が建てられた。従って、住居の合間を縫うように路地が湾曲している。また 1980 年代に NHA (National Housing Authority) により、オンサイトでの改善が行われたが、区画整備はされずに既存の路地のコンクリート補強、水道管や電柱の設置が行われた。つまり、当初の湾曲した路地や住人同士の社会関係等、行為を行う基盤が現在まで引き継がれているのである。

4.1.2 社会関係の集中/多様な社会環境の形成

対象地では、血縁関係者が多く集まっていることに加えて友人関係、3 歳の子どもから 70 歳の老人まで幅広い年齢、一人暮らし世帯と多世帯、土地、家屋の所有者と賃貸者、店主と客等の多様な関係性にある居住者がいる。もともと住んでいた住人が、東北部にあるサケーオ県から甥っ子この場所に呼びだし、その後彼の兄弟が仕事のために呼び寄せられ、居住者がこの場所で家族を持ち、親戚や友人が流入し、また近隣に新たに住居を建設するなどして居住地、社会関係が拡大した。そうした社会関係は、求職や住居建設、金の貸し借り、子育て等日常生活を行う上で重要なものとなっていた。

4.1.3 日常的行為に即した居住空間の形成

今回調査した住居群では、住居は 2 つのタイプに分類される。自力建設型と支援住宅型である。自力建設型は、居住する住人自身によって建設された住居である。こうした住居では、住居間に屋根がかかり日中の暑い時間でも過ごしやすくなっていたり、雑貨屋を開店するために商品を置ける棚や窓を壁に取り付けたりする等、

住居自体が日常生活に即した柔軟な形をとっていた。

(図 1) 支援住宅型は、規格化されており、住居自体の柔軟性は低い。しかし、住居と路地の間にできた隙間に、椅子やパラソル等のテンポラリーな家具を住人自身が持ち込み空間を柔軟に使用していた。湾曲した従来の路地形状と規格化された住居の間に隙間が生じ、そこが様々な行為を行える不定形な微高地になっていた。



図 1 自力建設型住居前面の定点写真

4.2 「コンパウンド」の解体

現在の「コンパウンド」は、4.1 で述べたような様々な諸条件のもと成立している一時的な状態である。特に、所得の高い世帯は今後「コンパウンド」から他の場所へ移住する可能性が高い。彼らの多くは結婚を機にこの場所に流入してきており、子育ての際の協力が得られやすいこと等からこの場所での生活に満足はしている。しかし将来的には実家や地方に移住したいのだという。何人かは住居や車を既にローンで購入していたり、給料の一部を貯蓄に回したりしている。中流階級程の所得を持つ住人にとってスラムは、生活費、特に家賃が高等しているバンコクにおいて日々の生活を近隣住民と営みながら、次のステップへ向けて貯蓄ができる合理的な居住地とすることができるだろう。

参考文献

- (1) Gross Regional and Provincial Product (NESDC) 2021
- (2) 遠藤環 2011『都市を生きる人々』京都大学学術出版会
- (3) Askew, M. 2022 『Bangkok Place, Practice and Representation』Routledge
- (4) 水野浩一 1981『タイ農村の社会組織』創文社
- (5) 口羽益生, 前田成文 1980,『屋敷地共住集団と家族圏』東南アジア研究 18 巻 2 号
- (6) Bangkok Metropolitan Administration(BMA) 2021